教育学部・教育学研究科授業評価報告書

2007年度

京都大学大学院教育学研究科
部局自己点検・評価委員会

■はじめに

川崎良孝（大学院教育学研究科研究科長）

今回で３回目の学生による授業アンケートの結果の報告書です。同じアンケートの質問で前々回、前回、そして今回と回を重ねることで見えてくることの厚みがますとともに、見方自体も変わってきます。２つの情報は１つの情報より優れているのは情報学の常識ですが、それは単に情報の量が増えるからだけではなく、２つの情報によってそれぞれの情報を比較し、その比較の中から新たな関係を読み取ることができるからです。

これまでは演習とゼミナール形式の授業を調査していたのですが、今回は、はじめて講義形式の授業のアンケートを実施しました。演習とゼミナール形式の授業は、どちらかといえば大学院生が中心の授業が多いのですが、今回の講義形式の授業は学部生が中心の授業です。ですから出席者も院生よりも学部生の占める割合が圧倒的に多いのです。それだけではありません。教育学研究科・教育学部が提供している講義形式の概論のいくつかは、教員免許・社会教育主事・司書資格などと結びついていますので、教育学部以外の学生も多数受講しています。そのため今回のアンケートの結果からこれまでとは異なる側面を理解することができます。その意味でも今回のアンケートの意味は大きいといえるでしょう。結果はこれまでと同様、授業に対して大変高い評価を得ることができました。

本研究科は、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ（平成17−18年度）「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」、21世紀COE（文学研究科拠点：平成14−18年度）「心の働きの総合的研究教育拠点」につづいて、19年度から特別教育研究経費（教育改革：平成19−23年度）「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」、そしてグローバルCOEプログラム（教育学研究科拠点：平成19−23年度）「心が活きる教育のための国際的拠点」、さらに大学院教育改革支援プログラム（大学院GP：平成19−21年度）「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成（京大型臨床の知創出プログラム）」と、さまざまな外部資金の導入によって、学部生・大学院生の教育の質の向上を高める研究・教育プロジェクトを進めてきました。これからもこのようなプロジェクトを強力に推進していくなかで、さらに学生・大学院生のニーズに配慮を払いつつ、学力と研究能力の向上を図っていきたいと考えています。

□□□　目次　□□□

■　はじめに …… i

■1．学生による授業評価について

1.1　教育学部・教育学研究科の授業評価の現状と今回の調査 …… 1

1.2　何のための授業評価か …… 2

1.3　何を評価するか・何を目的とするか …… 2

■2．授業評価の内容と実施方法

2.1　「学生による授業アンケート」の構造 …… 5

2.2　実施した授業科目 …… 5

2.3　実施した対象者 …… 6

2.4　実施した日程 …… 6

2.5　具体的な実施手順 …… 6

■3．「学生による授業アンケート」の結果と分析

3.1　作成と分析担当の区分 …… 7

3.2　第1部の結果と分析（数量分析）…… 7

3.3　第2部の結果と分析（質的分析）…… 23

3.4　第3部について …… 34

3.5　まとめ …… 34

■4．「学生による授業アンケート」の結果を受けて

4.1　「学生による授業アンケート」の問題点と改善の方向 …… 36

4.2　評価結果のまとめ方と公表の仕方 …… 36

4.3　報告書の利用法と評価 …… 37

■　資料「学生による授業アンケート」質問・回答用紙

■　編集後記

■1．学生による授業評価について

§1.1　教育学部・教育学研究科の授業評価の現状と今回の調査

本報告書は、昨年度につづき3回目の学生による授業アンケート調査結果の報告書である。前回のアンケートでは、演習・ゼミナール形式の授業を対象として調査し、のべ286部の回答用紙が回収された。ただ前回は回収の仕方に不備があり正確な回収率を出すことができなかった（前々回の回収率は57.9%）。結果は、授業に対して「満足している」が87.1%、「得たものがある」が95.8%、「役に立った」が91.9%で、前々回の結果がそれぞれ80.5%、93.1%、87.5%であるところから、いずれの項目においても前々回の結果を上回っていた。また記述方式の回答においても学生・院生の授業への真面目な取り組み方が伝わる印象的なものとなった。アンケートに回答し提出した人の学習意欲と満足度は回答しなかった人に比べ高いだろうと推測されるが、このことを考慮しても、本学部・研究科の授業にたいする学生・院生の評価は大変に高ものであったといえるだろう。

この学生による授業アンケートの結果は、「教育学研究科・教育学部授業評価報告書2006」としてまとめられ、本研究科の教員ならびに関連する自己点検・自己評価の担当者・研究者に配布された。また個別のアンケートの結果は、それぞれの授業担当者にフィードバックされ、授業改善のための資料となっている。さらにこの報告書をもとに本研究科の教員に対してFDをおこない、改めて授業改善への意識を高めた。そして、この報告書の全内容は、学生や学外の人にも読めるように教育学研究科のホームページhttp://www.educ.kyoto-u.ac.jp/に掲載されている。

2007年3月、本学部・研究科は6名からなる外部評価委員会の外部評価を受けた。その評価の対象の一つがこの学生による授業アンケートであった。本学部・研究科では、「評価の哲学」を探究し、独自の評価（方法）を構築しようとする意図から、学生が主体的に取り組む授業評価、オリジナルな手法による授業評価を行ってきたが、こうした取り組みに対して多くの委員から高い評価を受けた。しかし、前回の報告書でも自ら指摘しておいたとおり、やはり回収率の低さが問題点として指摘された（詳細は「外部評価報告書」参照、研究科のホームページにも掲載されている）。そのため今回の調査では、この指摘を受けて、質問の内容は変えずマークシート形式の回答用紙だけを別にすることによって回収率を高める工夫をした。

前回までの2回にわたる調査が演習・ゼミナール形式の授業を対象としていたのに対して、今回の調査では講義形式の授業を対象とした。しかし、基本的なアンケートの内容に変化はない。同じ様式のアンケートで調査することで、前の2回の調査結果と比較することが可能になる。ただ今回の調査からは先にも述べたように、アンケートの第1部のマークシート式の回答と、第2部・第3部の記述式の回答の回答用紙を、それぞれ回答用紙Aと回答用紙Bとして2種類を別々にし、第1部の回答に関してはその授業の場で回答してもらい100%回収することを目指した（結果は97%）。私たちは一方でできうるかぎり広汎に学生の回答

を回収しそこから授業への満足度を知りたいと同時に、できうるかぎり記述による生の声を知りたいと考えたからである。以下ではまずこのアンケートの基本的なコンセプトについて述べておこう。

（今回の授業アンケートは、回答用紙をＡとＢに分けたほかは、昨年と同じ様式のものであるため、以下の「§1.2　何のための授業評価か」「§1.3　何を評価するか・何を目的とするか」「§2.1　『学生による授業アンケート』の構造」は昨年とほぼ同じ内容である。昨年の報告書を読まれた方は、「§2.2　実施した授業科目」から読み始めればよいだろう。）

§1.2　何のための授業評価か

一般に学生による授業評価は、授業の改善を目的としてなされるものである。また同時に、授業評価は、学生にとっても授業を振り返ることで自身の体験や経験への自覚が深まることが指摘されてきた。この場合、授業内容に関する認識の反省と、その授業を受けることでの自己の変化についての反省の２つを意味していた。ところで、本学部・研究科の学問の研究対象は「教育」であり、このことから本学部・研究科が授業評価をするとき、これらの目的とは別に他の学部・研究科とは異なる目的が加わることになる。

他の学部・研究科においては、数学や経済学がそうであるように、授業評価は達成すべき教育の目標とは外的な関係にあり、教員にとっても学生にとっても授業評価は授業内容とは直接に関係がない。それに対して、「教育」そのものが授業内容を構成する本学部・研究科においては、この関係は内的であり自己言及的な関係にある。命題的にいえば、私たちは教育について教育している。私たちは学生の教育にたいする反省の力・考察の力を教育することを目的としている。学生が授業のなかで、教育とは何か、授業とは何か、知の伝達とは何か、さらには評価の技術、評価の心理学的基盤、評価の歴史、評価の社会的機能・国際比較、評価という制度といったことを、さまざまな学問的手法によって捉え直すことが目指されている。

このことを自覚するとき、私たちが実施しようとする授業評価に、この本学部・研究科の授業における特殊な関係が構造化される必要があると考えた。つまり単に授業評価をするだけではなく、同時に学生に教育・授業・評価とは何かを反省させ、学生の評価の力を養成することもまた授業評価の目的となる。そしてそのように養成された学生の評価力によって評価されることで、翻って教員自身の教育についての理論と実践のあり方が再形成されることになる。さらに、授業評価は授業を問うので終わらず、また授業のなかで改めてこのような授業評価とは何かがそれぞれの問題意識から問われることになるだろう。このような循環的な視点をもつことではじめて本学部・研究科の授業評価となるだろう。

§1.3　何を評価するか・何を目的とするか

部局自己点検・評価委員会は、以上のような本学部・研究科の研究と教育の特質を踏まえた上で、京都大学の授業評価において使用された調査票や、その他の既成の授業評価調査票

などを収集し比較検討しながら、改めて本学部・研究科の授業評価において何を問うべきかについて慎重に議論した。

小学校・中学校・高校といった学校の授業においては、各教科において到達すべき達成目標が決まっており、教科書を手がかりに授業を段階づけて進めることができる。それに対して、本学部・研究科の授業の多くは、小・中・高の学校の授業とは異なり、到達すべき達成目標を予め決めることができないものに関わっている。もちろん学問研究に不可欠な知識の伝達は、本学部・研究科のどの授業のなかにもあるし、また段階づけられた知識や技術の積み重ねが重視される授業もある。これまでの学説や歴史を正確に理解させることは授業において重要な課題である。しかし、このような側面は授業の一部をなすものでしかない。人間の教育を探究する本学部・研究科の理念から見るとき、このような知識を十分に身につけるとともに、その知識をもとに一人ひとりの学生が、人間についての謎に出会うことや、教育ということの事象の深さに気づくこと、人と向かい合う自己のあり方への反省をもつこと、あるいは歴史的・社会的・制度的文脈のなかで具体的に問題を発見し捉えることなどが授業では重要である。

このように考えるとき、本学部・研究科では既成の授業評価調査票で問われるような評価の問いは妥当しない。例えば、「シラバス通りに授業をしたか」などの評価は２次的であり、むしろシラバスを逸脱してでも授業の流れのなかで、学生の自覚や反省が深まることの方が重要である。「わかりやすい授業であったか」は、「わかる」ということが学生の既存の知識体系に無理なく収まるようなことを意味しているとするなら、やはり２次的なことである。学生の既存の枠組みを揺さぶり、新たな疑問や謎を感じさせ、自ら考えたり調べたりするようになる授業が「わかりやすい」授業などではありえないだろう。

それではどのような設問をすべきだろうか。もっと客観的な設問を設定すべきだろうか。評価を客観的なものに近づけようとすると、「授業の開始と終了は時間通りでしたか」のように、たしかに客観的ではあるがほとんど無意味ともいうべき設問となる。むしろ本学部・研究科の授業の目的が先に述べたようものであるなら、評価はどこまでも主観的なものであることを自覚して設問を設定する方がよいと考えた。

以上のような授業観・評価観に立つとき、学生自身が自分にとってその授業に「満足しているか」、その授業から「得たものがあるか」、その授業は「役に立ったか」と反省することは、シンプルではあるが重要だと考えた。私たちはこの結果から授業が学生にとってどのように受け止められていることを知ることができる。しかし、私たちは受講した学生の満足度が高いからといってその授業が優れていたことを示すものとは考えない。また反対に満足度が低いからといってその授業が問題があるとも考えない。ここでは満足の質や理由がわからないからだ。それでもこのような設問は教員によってそれぞれの授業観と照らし合わせて結果を解釈し、自分の授業を捉え直すためには有益であるにちがいない。今回の評価の対象とする授業は、これまでの演習・ゼミナール形式の授業ではなく講義形式の授業ではあるが、その講義において学生の授業への自己の向上への期待・その達成感・心がけていることなど

を自己評価してもらおうと考えた。当然このような設問から学生は教員が授業の構造をどのように捉えているのか、学生に対してどのような授業態度を期待しているのか、などを読み取るはずであり、またそのことを期待もしている。

そこで「学生による授業アンケート」は、次の３つのパートに分けて評価することになった。それぞれのパートが目指した評価は、それぞれ以下の通りである。

第１部　授業に対して「満足しているか」「得たものがあるか」「役に立ったか」など、学生が主観的・主体的な見地から授業を評価する。

第２部　学生が授業に向かうときの期待や達成感、授業への参加度などを自己評価する。

第３部　それぞれの授業担当者が授業のなかで独自に求めている成果がどれだけ実現されているかを、学生が自己評価する。

■2．授業評価の内容と実施方法

§2.1　「学生による授業アンケート」の構造

以上のような授業評価の目的を踏まえ、授業評価調査票（授業アンケート）は、形式的には実施の都合上、回答用紙ＡとＢの２枚に分かれているが、内容的には大きく次の３つのパートに分かれている。それぞれのパートの調査項目が目指す評価は以下の通りである。(本報告書末の資料を参照)

第１部（問１から問４）	マークシート方式による回答可能な質問。(回答用紙A)
第２部（問５から問７）	学生が授業に向かう態度を理解し、また学生自身に「振り返り」の機会を与えるために適切な問いを設定し、その問いに対して自由記述で答えさせる。(回答用紙B)
第３部（問８から問９）	各授業が目指している教育効果の独自性を加味した自由記述。この質問内容は授業担当者にまかされる。(回答用紙B)

できうるかぎり学生の多様な評価の声を聴き取りたいということを考慮して自由記述を大胆に導入している。

§2.2　実施した授業科目

前期・後期の演習・ゼミナール形式の授業のアンケートが終了したので、今回は講義形式の授業を調査することにした。講義形式の授業には「概論」が多く、学部教育において基礎的な知識の伝達と学問への関心を深める重要な意義を持っている。また教員免許・社会教育主事・司書資格などとの関係で科目によっては教育学部外の学生も多数受講しており、教員養成の機能としても重要な意義を持っていると考えられる。実施者と実施した授業科目名は以下の通りである。

【実施者】	【実施科目名】
矢野智司・桑原知子・渡邊洋子	教育研究入門Ⅱ
駒込　武・杉本　均	民族と教育
矢野智司	教育人間学概論Ⅱ
遠藤利彦	発達教育論Ⅱ
齊藤　智	教育心理学概論Ⅱ
大山泰宏	臨床心理学概論Ⅱ
稲垣恭子	教育社会学概論Ⅱ
前平泰志	生涯学習概論Ⅱ
杉本　均	比較教育学概論Ⅱ
高見　茂	教育行政概論Ⅰ